

山高しげりの参議院議員としての活動

○ 大阪成蹊大学 今井 涼 (会員番号 008661)

キーワード：山高しげり，全国未亡人団体協議会，全国地域婦人団体連絡協議会

1. 研究目的

本研究は女性運動家である山高しげり研究の一環である。多岐にわたる山高しげり（以下山高）の活動の中でも戦前の婦人参政権獲得運動と母性保護の運動や，戦後の全国地域婦人団体連絡協議会（以下，全地婦連）における活動と全国未亡人団体協議会（以下，全未協）の母子福祉運動はよく知られているが，本研究で焦点を当てるのは，これまでほとんど注目されてこなかった山高の参議院議員としての側面である。

山高の先行研究の蓄積は豊かとは言えない。文献には，五味編（1980）の人物史や，聴き取りを元にした解説として鈴木聿子（1998），茨城未亡人連合会と山高との関わりを解説する鈴木聿子編（1983）がある。先行研究には，山高の母子福祉の動機に関して守田（2004），「母子一体の原則」への指摘として林（2000）・副田（1983），山高の戦前の運動を戦争協力と位置付けた鈴木裕子（1986），児童扶養手当制度に関する全未協の足跡を整理した堺（2020），全未協での山高の役割を論じた今井（2013）等がある。しかしそれらでは参議院議員としての活動にほとんどふれられていない。

一番ヶ瀬康子は山高への聴き取りに際して「『母』の政治を願っておられた」と感じたという（山高 1982：238）。本研究では山高の参議院議員としての活動を検討し，山高が実現しようとした母の政治とはどのようなものかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

戦前の山高は婦選獲得同盟にて市川房枝と共に婦人参政権運動に熱心に取り組んだ。にもかかわらず戦後すぐに議員を志したわけではなく，初めて参議院選挙に立候補したのは1962年であった。これについて山高は「有権者の立場で仕事をしたかった」と述べ，全未協の母子福祉運動と，「有権者組織」全地婦連の「自主独立の一票を培う」「育成」に邁進していたからだとしている（山高 2007：183）。立候補を決意したのは，全未協と全地婦連双方の団体により後援会が組織され，推薦されたからであった。山高の議員活動は，母子福祉施策の拡充や女性の声を政治に反映すべく，全未協と全地婦連の活動の延長から始まったのである。したがって，参議院議員の山高の活動を追跡することは，山高の母子福祉運動や，女性の参政権の行使の実践をたどることとなる。政治レベルでどのように具体化しようとしたのかを検討することは，山高の人物を掘り下げることになる期待できる。

研究の方法は文献研究による。主な検討資料は都地婦連機関紙である『婦人時報』，全未協会報紙である『おとずれ』，国会会議録である。その他，適宜山高の著作も検討する。

3. 倫理的配慮

一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規程に則っている。開示すべき利益相反はない。

4. 研究結果

山高は1962年から1971年まで参議院議員を務めた。参議院では院内交渉団体の第二院クラブに所属して市川房枝らと協働した。検討の結果、国会で山高が最初に発言したのは1963年2月20日開催の参議院本会議にて母子家庭の置かれている窮状を背景に、母子福祉総合法の制定や寡婦控除の引き上げ、児童扶養手当制度の対象拡大、家内労働者保護等について各関係大臣に見解を問うたもので、以降も予算委員会や法務委員会を中心に母子福祉行政や寡婦対策、児童福祉、売春問題等について発言を行っていたことが確認できた。

5. 考察

山高の国会での活動はまず母子福祉法制定の公約を実現するために行われた。1964年に同法制定が実現した後も制度の拡充や、子育てを終えた寡婦の生活問題の対策などについて追求し、母子家庭の母親と子どもの権利擁護について発言を続けた。母子家庭の問題のほかには、売春問題への取り組みや、国会議員歳費値上げについて反対の立場を取っていたことが注目される。これらは全地婦連による運動と歩調を合わせるものであった。

以上のように、山高の国会議員としての活動は、全未協、全地婦連における活動の目的や理念を実現するために行われていたことが確認できた。

参考文献・資料

五味百合子編（1980）『続社会事業に生きた女たち』ドメス出版。

国会会議録検索システム <https://kokkai.ndl.go.jp/#/>（閲覧日：2025.5.26）

林千代（2000）『母子福祉を拓く』ドメス出版。

今井涼（2013）「母子福祉法をめぐる全国未亡人団体協議会の運動」同志社大学大学院社会学研究科2012年度修士論文。

守田幸子（2003）「山高しげりと『母子福祉』—利己から利他への転轍」『人間文化研究科年報』19, 465-476。

堺恵（2020）『児童扶養手当制度の形成と展開 制度の推移と支給金額の決定過程』（晃洋書房）。

副田あけみ（1983）「『母子一体』の歴史的変遷過程—大正・昭和時代の母親観、子ども観を探る」『人文学報』159, 61-94。

鈴木聿子編（1983）『未亡人たちの戦後史—茨未連「母子草」から—』（筑波書林）。

鈴木律子（1998）『シリーズ福祉に生きる 山高しげり』大空社。

鈴木裕子（1986）『フェミニズムと戦争—婦人運動家の戦争協力』（マルジュ社）。

山高しげり編（1953-77）『婦人時報』東京都地域婦人団体連盟（高橋雅人発行（2007）『日本消費者問題基礎資料集成 7』すいれん舎による）。

山高しげり（1982）『わが幸はわが手で』ドメス出版。

山高しげり（2007）『山高しげり著作集第3巻 山鶯 随想集』日本図書センター（原著は山高しげり（1975）『山鶯』牧羊社）。

全国未亡人団体協議会（1961-1964）『おとずれ』全国未亡人団体協議会。